

いよいよ講演まで一週間となりましたが未だに何かからお話しようかなかなか決まりません

皆さんにお話ししたい事は沢山ありますのに一

誤解されては困ります

私は学者ではないのでそれ程確かなことは何一つ申し上げられません

ただ これ迄三十年余りして来たことは色々な文豪たちの書簡集を読んで楽しんだり感心したりまるで自分に宛てられた手紙であるかの様に感じて反省したり元気になったり一緒に悲しんだり笑ったりして来ただけなのですから…

その結果手紙を書くことが上手になったかといいますと少しもそんな事はなく全く頼りない手紙文化研究家なのでありますが文豪たちの何万通もの手紙を読ませていただきわかったことがあります

それは手紙は書きたくて書いたものでなければつまらないという事です

手紙の種類に関係なくそう言えます

メールでも同じで書きたい伝えたいわかって欲しいという強い願いがないと書いていても退屈です

退屈を通り越して苦痛になる事も少なくありません

だから時々私たちは「メールの処理」とか「手紙を書かなければ」という言い方が自然に出てしまいます

メールや手紙は「処理するもの」「書かなければいけない」ものとなった瞬間に必ずダメになります

どんなに沢山手紙やメールの作法や常識を知っていても敬語の使い方が正しくてもその手紙はダメです

ダメというのは言い過ぎかもしれませんが生きていないと言えるでしょう

書く人の人柄や趣きがにじむ生き生きとした息づかいや命のほとぼしりが感じられる手紙でなければ人の心は動きません

私たちは本当は心を動かし生きている事の喜びや実感を得たいのであって情報を知りたいのではないとさえ思われます

私がそんな事を強く思うようになったのは夏目漱石の手紙に出あってからです  
講演の葉の裏表紙にある様に漱石は「小生は人に手紙をかく事と人から手紙を  
もらふ事が大すきである」と考えていました

だから漱石の手紙は楽しく愉快で趣き深く私たちの心を大変心地よく動かして  
新鮮な風を感じさせてくれます

まさに生きている事の喜びを教えてくれる手紙です

情報の伝達ではありません

伝達だけではないのです

漱石ののこされた手紙二千五百通余りの中にこんなフレーズがあります

「今夜寝しなに手紙を書き候 <sup>これ</sup>是も入らぬ事に候 <sup>ただ</sup>只筆が持ちたくなつたからに候」

つまり伝えるべき情報はなにもないのに手紙が書きたくなつたという事です

ということは「唯あなたに会いたくなつた」ということに他なりません

好きな人と親わしい誰かと会いさえすれば何も言わなくとも一緒に居るだけで  
満たせれる思いがありますが手紙は残念なことに時空を隔てているために何か  
を言わないと存在がわかりません

だから漱石はたとえば気のおけない門下生の一人野村伝四くんに会いたくなつ  
たとき葉書きをかきました

そのときの漱石の様子を想像してイラストにしたのが講演の葉の表紙の絵です  
そしてそのときの手紙が「ビスケットをかぢりて～」から始まる例の手紙です

(ちょっと全文に目を通してください)

ここに書かれている事で伝達すべき事は最後の所だけです

「そして君は手伝に来て呉れるだろうね」一引越しの手伝いの依頼だけが内容  
といえは内容で後はなくてもいい事柄ばかりです

しかしこのどうでもいい話にこそ漱石の伝四くんへの愛情がこめられているだけでなく漱石の呑気さもしくは呑気な自分や時を楽しもうとする漱石の穏やかなもくろみを感じられ私に宛てられた手紙ではないのに私に宛てられた手紙であるかのように私の心をあたたかく包み込みいやしてくれます

何をあくせくしているんだい君は人生はこうして楽しむんだよと優しく叱ってくれます

三十年余りも文豪たちの手紙に親しみ手紙の書き方の歴史にも少し触れて来た私ですが私の学んだことはほんのわずかで以上のお話に尽きるといっても言い過ぎではありません

ただしもう一つだけ付け足すべき大切なことがありました

それは敬意ということです

敬語はあっても敬意のない手紙やメールにしばしば出あいます

自分でも書いてしまう事があります

そして敬語がまちがっていても足りなくても敬意に満ちた手紙に出会うことがしばしばあります

文豪たちと漱石の手紙に教えられたもう一つのことは敬意です

彼らは概して不愉快な相手に対しても後輩に対しても年齢や地位がかけ離れていても心からの清潔な敬意を忘れません

漱石は手紙の中でこんなことも言っています

「もっと読手の神経をざらつかせずに穏やかに人を降参させる批評の方が僕は真に力のある批評だと云ひたい」

敬意に裏打ちされた「相手の神経をざらつかせない」ものの言い方は手紙を書く上でもとても重要な事だと漱石は教えているようにもとれます

少し話を前に戻しますが書きたい手紙がいい手紙だとしたらどうしたら書きたくなるかということが重要になってきます

書きたい気持ちは自然に生まれて来るものなので無理に作ろうとすればその時点でウソになり生き生きとした手紙にならないでしょう

例えば「拝啓 春暖の候」と手紙で書き始めたり「いつもお世話になってます」とメールを始めるとそれだけで私はテンションが下がり書きたい気持ちがしぼんでしまう事がよくあります

自分の言葉ではないような気がするからです

無論公式なパーティーにオリジナルTシャツで臨めばヒンシュクを買うでしょう  
礼服が必要です

「私は奇妙な者ではなく極普通の人間ですからご安心下さい」と敵意がないことを示さなくてはならない場面もあります

そんなときは「拝啓 春暖の候 益々…」 「いつもお世話になっております」と書き始めます

しかしそんな公式のパーティーなんて一生に何度あるでしょう

私たちが教えられて来た手紙の作法や常識の多くは公式のパーティーの際に役立つ事ばかりです

その証拠に文豪たちの何万通もの手紙を見るとその九割以上は手紙のいわゆる作法からは外れたものばかりだと言ってもいいかもしれません

自分らしい手紙のためには書き出しが重要です

書き出しから押しきせの言葉を与えられたらもう身動きがとれません

楽しくなんかなりっこないのです

だから私は手紙を書くときしばしば型を外します

それが当日お持ちする私がこれ迄に書いた手紙のコピーであり今書いている手紙です

私は手紙に絵ばかり書いているようですが絵を描けば型破りという訳ではありません

皆さんにお見せするのには、にぎやかな方が面白いのではとあえて絵柄の入ったものを多く持参しようと考えています

とにかく自分の心が浮き立ち人様に手紙を書きたいと思えるようにするために  
は何でもやってみようと思っています

ペンの書き味が手紙を書く動機になる事もあります

ガラスペンを買いました

オシャレな感じがしたからです

そして書いてみますと生まれて初めて知る新鮮な書き味で硬いことは硬いのですが予想していたガリガガサガサした感じは少しもなく意外になめらかで一回インクを付けただけで何行も書ける機能性も備わっていました

ミュージシャンをしている若い女性の知り合いにコンサートの感想を手紙で書くときにつかってみたくなりました

そして当日持参する予定の私の手紙の多くで使用してこの手紙でも使っている筆 これは最初は私にとって大なる冒険でした

私は字が下手で味のある字でもなく筆で見苦しく手紙を書けば失礼の極みと思ったからです

しかし使ってみると面白い

私は子どもの頃から筆圧が強く硬いえんぴつでノートに穴をあける程強く書いていたのでボールペンでも何でも手が痛くなる程強く軸を握るのでガリガリ紙を削るように書くのが癖でした

ところが筆で書くとおさえは必要でも力を抜くことの必要の方が勝り軸を強く握ることはありません

そして何よりも墨のにおいが心地よく半紙を滑る筆の感触 筆先の割れや墨の不足によるかすれ とくに墨汁ではなくすった墨を使うときの期せずして起こる濃淡は味わいとなります

又墨をすっているときの時間もぜいたくな感じがして愉快です

そんな墨体験は書くための十分なモチベーションになります

さらにこの墨の面白さを進めると巻紙というものに辿り着きます

今は何でも頁物です

そんな文書しか見た事も書いたこともない私にとって巻き物体験は大いに興奮するものでした

書いたもの全体が一度に見られるのは愉快です

大した文字量でなくても壮大な印象の手紙になるので痛快です

まだまだ色々手紙を書くときのモチベーションの上げ方はありますがとにかく手紙を書くのが楽しくなる方法 もらった相手もサプライズと感じる手紙を考える事はなかなか愉快です

もちろんそんな仕掛けを少しも必要としないときもあります

むしろ仕掛けを考えているうちに消えてしまう微妙で大切な思いもあります

書きたいと思った瞬間に書かないとその思いが逃げたり色あせたりしてしまうことがあります

そんなときは食堂の紙ナプキンに書いたりもします

広告のチラシの裏に書いてあとで清書する事もあります

書きたいと思ったときその生まれたての思いを大切にすると書いていて面白い手紙になり相手にもきっとその思いが新鮮に伝わると思います

毎日はいつも楽しさに満たされている訳ではありません

けれどどのような局面にあっても豊かに生きることはできる気がします

豊かな手紙を書いて楽しみあため合いどんな状況に於ても少しでも愉快にすごそうとした文豪たちや漱石の手紙とそこに現れた生き方から私は何らかのヒントを私達が手紙を書くために即ち生き生きと生きるために必要なヒントを探し当てたいと考えています

そんな願いが今回の講演で皆さんに少しでも伝われば幸いこの上なく思います

二〇一六年 一月 吉日

中川越

皆々様

追伸

この手紙に描いた虹っぽい模様は「朶雲<sup>だうん</sup>」を真似たものです

夏目漱石や正岡子規や芥川龍之介の手紙の中にこの文字が見られます

「朶雲<sup>だうん</sup> 拝誦<sup>はいしゅう</sup>」というフレーズがあります

あなたの素敵な手紙をつつしんで拝見しましたという意味です

唐の時代今から千数百年も前の中国に韋陟<sup>いちやく</sup>という人がいて五色に彩られた美しい書簡箋を使っていたという故事をもとに相手の手紙を敬ってという言い方です

「朶雲 拝誦」は虹色に輝くあなたの美しいお手紙をつつしんで読ませていただきましたという最上級の感謝を表す言い方となります

朶雲 = 虹色のように美しく輝く便箋にはなりませんでしたがそんなつもりでした

ついでにもう一つ人から手紙をいただいたときに使ってみたいいい言葉があるので紹介します

ふうしんうんしよじてんしょうりん  
風信雲書自天翔臨

これは空海（弘法大師）真言宗の宗祖が八一一年～八一三年頃に最澄天台宗の宗祖から手紙をもらったときにその返信の冒頭に書いた有名なフレーズです

清らかな風のような美しく輝く雲のようなあなたの手紙が天から舞い降りて今目の前にしておりますという意味です。

朶雲 拝誦

風信雲書自天翔臨

いつかあなた様もつかってみてはいかがでしょうか